

第4章 自分なりの着眼点を見つけよう

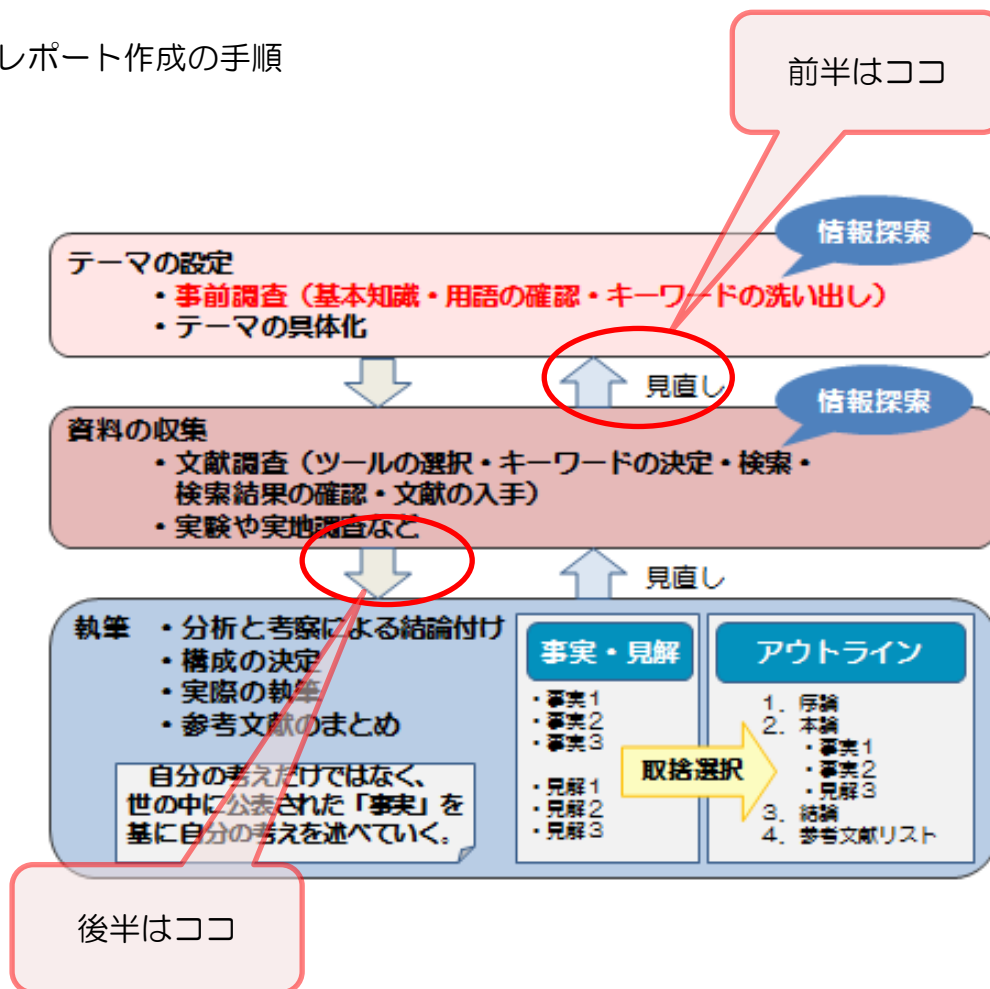
ーレポートの土台作りー

■ 本章の目的

みなさんはこれまでの章で、自分の興味のあるテーマについて、大まかに資料を集めていく方法を学びました。次は、そこから具体的にテーマを絞り込み、レポートで扱う問題と着眼点を見つけていきます。前半はその流れと、着眼点の大切さを確認します。

問題と着眼点が固まったら、今度は自分の意見を証明するための資料を集め、レポートのアウトラインを作成していくことになります。後半ではレポートの構成要素と、アウトラインを作る時のポイントを確認します。

レポート作成の手順



1. 扱う問題と着眼点

1.1 「テーマ」から「扱う問題」へ

第2章と第3章では、大まかなテーマに沿って資料を集める方法を学びました。こうして資料を集めたら、それを読んで興味・関心を持ったことをチェックしていきましょう。これはテーマを絞り込んでいき、そのレポートで扱う問題を見つけるための作業です。

このテキストで扱っている問題解決型のレポートでは、まず、どんな問題を扱うのか明確にしなければなりません。ここで大切なことは、扱う問題を「問い」の形式にしておくことです。「〇〇はなぜ△△なのか？」という「問い」の形式になっている問題に対しては、「それは××だからである」という明確な結論を示すことができます。しかし、「〇〇について」のような漠然とした問題にしてしまうと、明確な結論が示せず、何が言いたいのかわからないレポートになってしまいますので、気をつけてください。

レポートで扱う問題を見つけるのは、簡単なことではありません。様々な資料を読んでも、なかなか見つからないという人もいるかと思います。扱う問題を見つけるのに苦労している人は以下のポイントを参考にしてみてください。

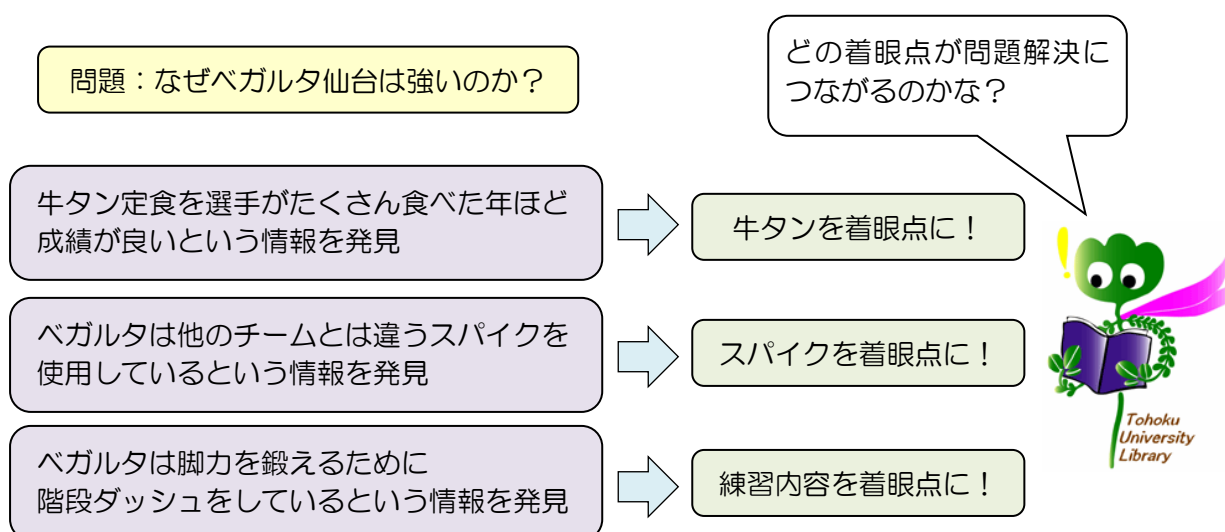
- A) 最初はテーマを大きく全般的につかめる資料を読んで、それから具体的な問題について考えていくのがよいでしょう。最初から小さいテーマで検索すると、文献が見つかりにくいので注意してください。
- B) 研究の素材にするときには、楽しむための読書とは読み方を変えて、もっともっと小さなところを疑問に思うことがコツです。なぜ？と思う部分が増えれば、それだけ問題の候補が増えることになります。
- C) 何か思いついたら、それを紙やパソコンなどに書き留めておきましょう。書き留めたことを後から眺めることで頭が整理できますし、思わぬ発見が見つかる可能性があります。

1.2 着眼点はオリジナリティ

扱う問題が見つかったら、まずは問題に対する回答の仮説を立てるための調査を行いましょう。その問題についての詳しい資料を読み、知り得た情報を整理分析していきます。そして、その中から解決の糸口になりそうな着眼点を見つけるのです。

着眼点はみなさんそれぞれのオリジナリティであり、レポートの売りとなるものです。同じ問題を扱っていたとしても、着眼点が違えば内容は大きく変わっていきます。問題解決に相応しい着眼点を見つけることがレポートを作成する上でとても大切なことです。

もちろん着眼点を見つけた時点では、まだその着眼点で本当に問題を解決できるのかどうかはわかりません。この後のステップで今の着眼点ではダメだと分かったら、また別の着眼点を見つけていくことになります。

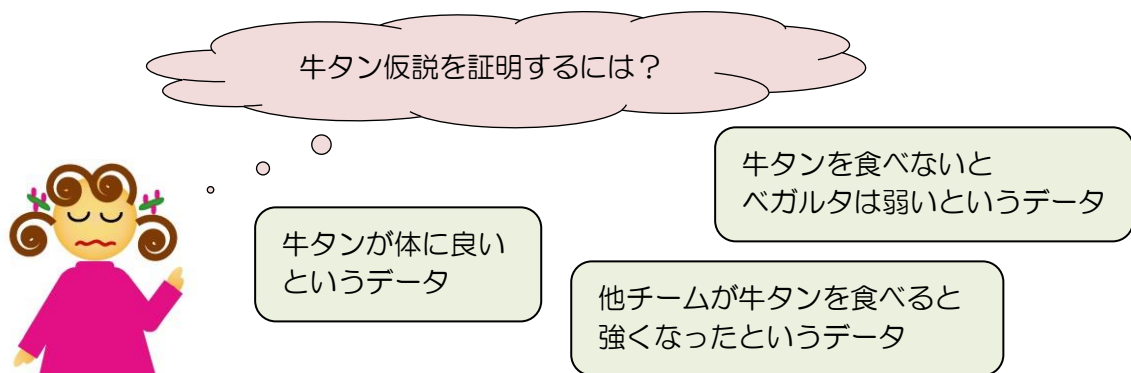


1.3 仮説を立てたら必ず検証

着眼点を見つけて回答の仮説を立てたら、次はその仮説を検証するための調査を行いましょう。物事には様々な要素が関わっているので、1つの側面から見た時は正しいと思われた仮説も、別の側面から見たら外れなものかもしれないからです。

この段階ではただやみくもに調べるのではなく、目指す結論を支える根拠となる事実・データを得るために調べます。論理的に自分の仮説を証明するためには、どんな事実・データが必要かを意識すると、効率的に調べることができるでしょう。

必要な事実・データを得ることができれば、最終的なレポートの執筆に進むことができます。逆に自分の仮説を否定する事実・データが見つかった場合は、前のステップに戻って着眼点や扱う問題を見直さなければなりません。



1.4 扱う問題と着眼点を見つけるまで ～はぎのすけの場合～

実際に、扱う問題と着眼点を見つけるまでの流れを、図書館マスコットキャラクター「はぎのすけ」がレポートを書いた時の事例から見てみましょう。

- ① スポーツと文化に関するレポートを書こうと考え、それらの要素を含みそうな相撲を大まかなテーマに設定する。
- ② 近年の相撲界の話題を探ろうと相撲に関する新聞記事を検索した結果、2011年2月の八百長メール事件に目をつける。
- ③ 「相撲に勝って勝負に負ける」という言葉もあるのに、なぜ八百長が存在するのだろうかと疑問に思う。
- ④ 「大相撲の八百長は許容されるべきか」を扱う問題として設定。
- ⑤ 調べた結果、八百長を擁護する意見では大相撲はスポーツではなく文化だという意見があることが分かる。
- ⑥ 有力な反論を見つけられないまま、とりあえず八百長は一般的に悪いこととして書いてみる。
- ⑦ 書いてみたものを先輩のはぎさんに見せて相談したところ「根拠が弱いから、何か良い着眼点を見つけよう」というアドバイスを受ける。
- ⑧ 新田一郎氏の本で相撲は複層的なものという意見を見つける。
- ⑨ 「相撲を複層的な存在と考えれば、八百長を非難することと大相撲の文化的側面を擁護することは対立しないのではないか」という着眼点を見つける。
- ⑩ 着眼点に合わせて、扱う問題を「八百長を排すると大相撲の文化が損なわれるのか」に修正し、レポートの土台が固まった。

2. アウトラインの作成

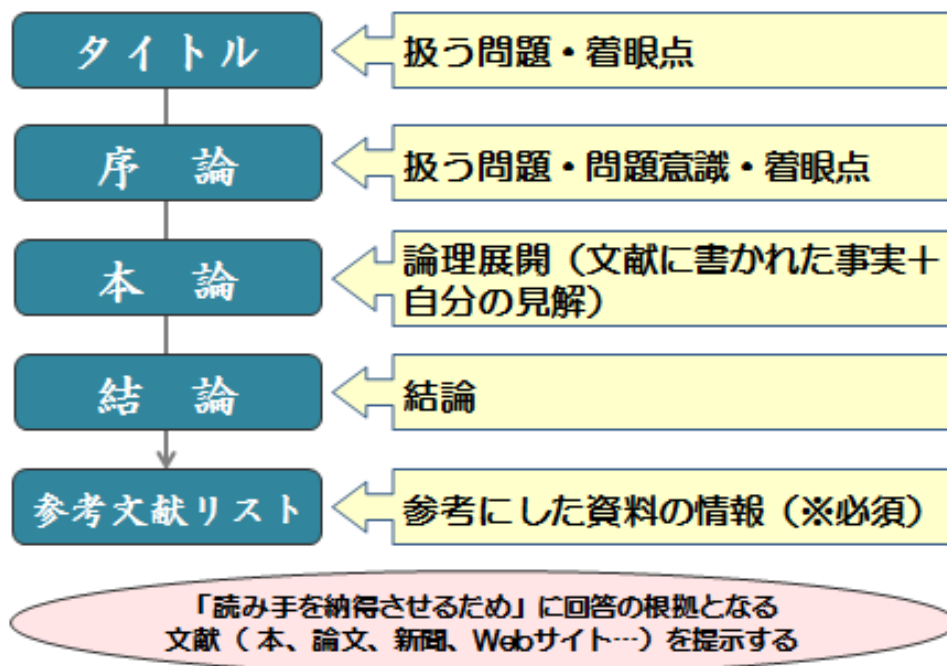
2.1 レポートの構成の再確認

レポートで扱う問題、解決のための着眼点、結論を証明するための事実・データ、これらが揃ってくると、いよいよ実際の執筆に進むことになります。しかし、ここでただ勢いにまかせて書いてしまうと、読み手にとって分かりにくいレポートになってしまう恐れがあります。まずはアウトラインを作成し、それを設計図として文章を組み立てていきましょう。

第1章でも出てきましたが、レポートの構成は下記の通りです。この章の章末の練習問題は、それぞれの構成要素を記入していく形式になっているので、練習問題を進めれば自然とレポートのアウトラインが完成することになります。

また、アウトラインの作成もレポート執筆も、タイトルから順に書いていく必要はありません。本論と結論をまずしっかりさせてから、序論で書くべきことやタイトルを考えた方が上手くいく場合もあります。自分の書きやすいところから進めていくのが良いでしょう。

それではレポートの構成要素を詳しく確認していきましょう。

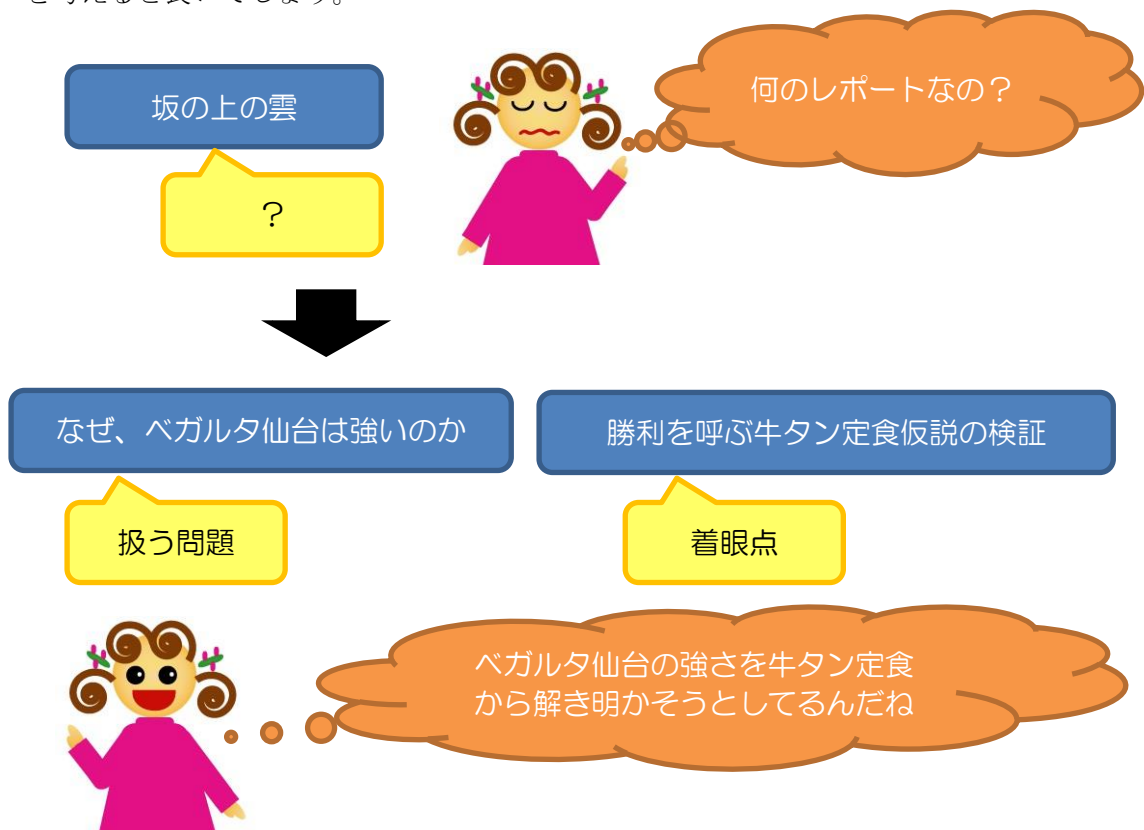


2.2 タイトル

良いタイトルの条件は、レポートの中身が想像できることです。具体的には、扱う問題と着眼点が入れられると良いでしょう。文芸作品ではないので、抽象的なタイトルを付けられても読み手は困惑してしまいます。

例えば、「坂の上の雲」というタイトルだと、何について書かれたレポートなのかはつきりしません。これに対して、「なぜ、ベガルタ仙台は強いのか：勝利を呼ぶ牛タン定食仮説の検証」というタイトルだと、どういった問題を解決するために、どのようなことを調べたのかがすぐにわかります。これは、前半部分に扱う問題が、後半部分に着眼点が入っているからです。

扱う問題と着眼点は序論の中ではっきりさせているはずなので、序論を書いてからタイトルを考えると良いでしょう。



2.3 序論

序論に必要なことは、「何をやるのか」と「どうしてやるのか」の2つを明確にすることです。そして、「どうしてやるのか」に説得力を持たせるためには、扱う問題、問題意識、着眼点の3つを説明しなければなりません。これらを簡単な言葉に置き換えると、以下のようになります。それぞれの内容を、アウトラインの中できちんと整理しておきましょう。

- ① 何を前にして
- ② どういう問題に取り組むのか → (=扱う問題)
- ③ どうして取り組むのか → (=問題意識)
- ④ どういう着眼で(着眼理由も) → (=着眼点)
- ⑤ 何をやるのか

①は扱う問題の現状、つまり、なぜそれが問題になっているのか、ということを説明します。これがないと、その問題に詳しくない人にはレポートの意義が上手く伝わりません。

②はレポートで扱う問題は何なのか、どんな疑問を解決しようとしているのかを説明します。これがはっきりしていないと、焦点のぼやけたレポートになってしまいます。

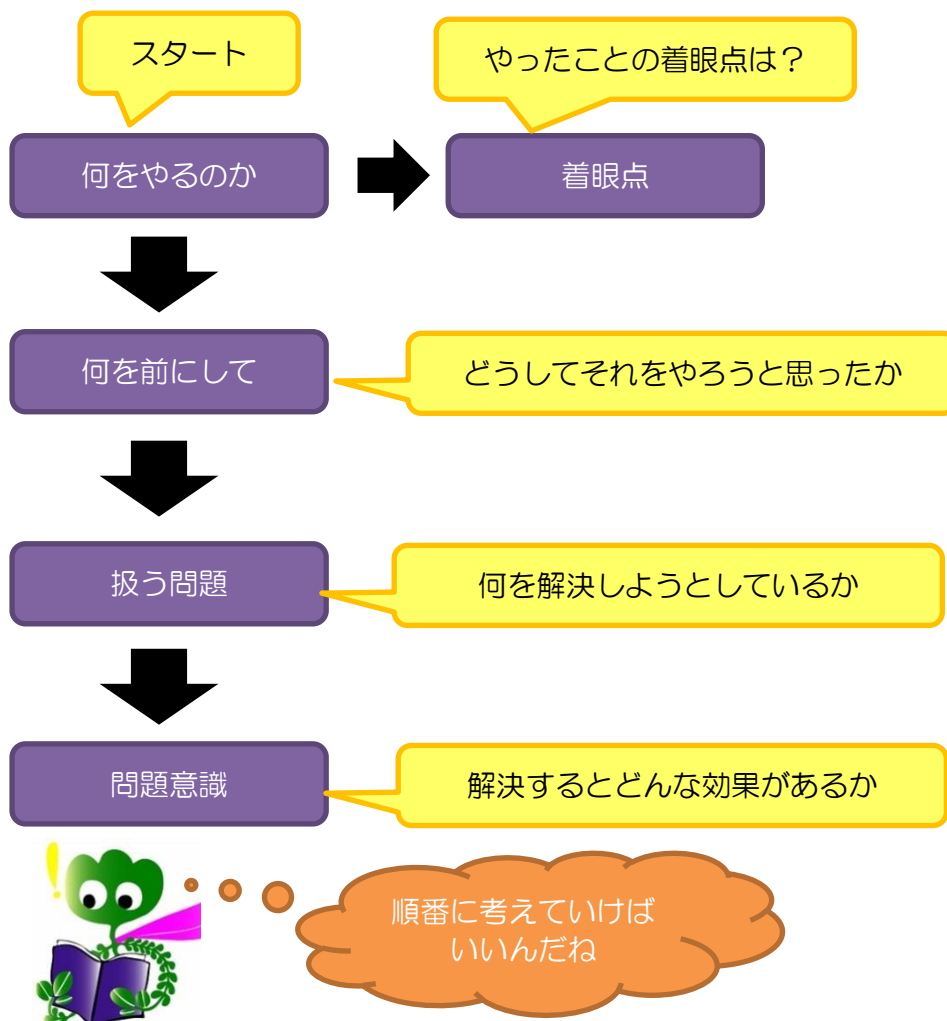
③はその疑問を解決すると、どういう効果があるのか、ということの説明です。人々にとって意義深い効果があれば、それだけ読み手の興味を惹くことができます。

④はどういう着眼点から問題を解決しようとしているか、ということの説明です。着眼点に説得力を持たせるために、なぜその着眼点を選んだのか、ということも説明しておきましょう。

⑤は実際にレポートで何をやったのか、どんなことを調べたのか、ということの説明です。あらかじめ序論に書いておくことで、読み手がスムーズに本論に入ることができます。

練習問題ではこれらのうち特に重要な「扱う問題」「問題意識」「着眼点」を記入するようになっていますが、実際に執筆する際には全ての要素を意識して書くようにしてください。

それではこの5つの要素を効率良く考えるには、どうしたらよいでしょう？ 本論と結論が完成していれば、レポートで何をやったのかは明確になっているはずですが（もし明確になっていなければ、本論と結論を見直してください）。つまり、本論と結論のアウトラインを考えた後に序論を考えれば、⑤は既に決まっているわけです。後は、それを起点に他の要素を考えていきましょう。



2.4 本論

本論では集めた事実から自分の主張を展開していくことになります。説得力のある主張にするためには、下記の条件を満たす必要があります。

- ① そう主張する理由（根拠）を述べている
- ② 理由は、客観的な事実に基づいている
- ③ 理由は論理的である
- ④ 他の主張に比べ、その主張の方が確からしい

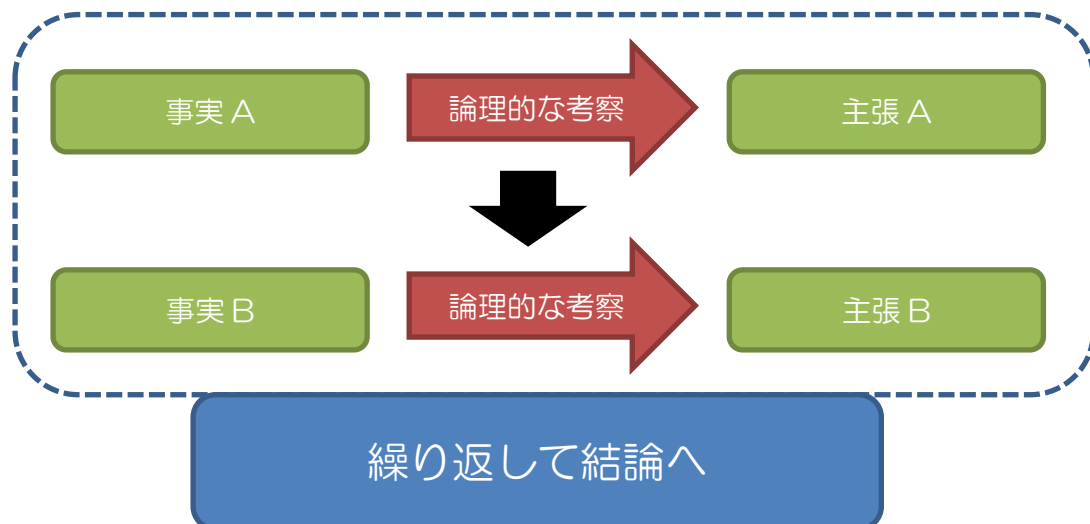
まず①ですが、主張の理由や根拠が分からなければ、読み手がこちらの意見に納得してくれないのは当然のことです。レポートを読むのは家族や友人ではないのですから、そういった人々を納得させられるような理由を、きちんと説明する必要があります。主張が複数あればその全てに理由が必要になりますので、理由を説明していない主張がないように気をつけてください。

次に②ですが、出発点が信用できなかつたら、やはり納得のいく主張にはなりません。自分がこのように考えているから、ということではなく、学術的に認められるような事実やデータを用意しましょう。また、ここで述べる「客観的な事実」も、文献に書いてあることが全て客観的な事実と言えるわけではありません。文献に書いてあることを批判的に検討することも忘れないでください。

③は当然のことですね。客観的な事実に基づいていても、論理展開がおかしければ、その主張は納得してもらえません。論理展開のおかしさには、論理的に成り立たない主張をしている場合と、他の可能性を検討していない場合の2つが考えられます。特に後者は見落としがちなもので、十分気をつける必要があります。仮説を検証する際には、結論ありきで考えるのではなく、常に仮説を否定する事実がないか考えながら検証していくようにしてください。

最後に④ですが、他の主張というのは、いわば別の仮説です。着眼点を考える際に他の着眼点の候補もあったかと思いますが、それらから考えられる仮説よりも、自分が選択した仮説の方が確かであることを説明できれば、説得力を増すことができます。

練習問題では、表の左側に主張の理由となる客観的な事実を、右側にそこから論理的に導き出した考察結果（＝主張）を記入していくことを繰り返していきます。書き終わったら見直して、論理的におかしいところがないか確認しましょう。問題なければ、本論のアウトラインの完成です。



本論はこれらを踏まえて執筆していくわけですが、他にも注意すべきポイントが 2 つあります。

まず 1 つ目は、せっかく調べた成果でも、結論を導くのに不要なことまで入れてしまうと、焦点のはっきりしないレポートになってしまうということです。必要なことと不要なことの取捨選択をするよう心がけましょう。

それから 2 つ目は、レポートは章立てにすると読みやすくなるということです。序論、本論、結論の章を分けるだけでなく、本論の中でも適切に章を分けると、ぐっと読みやすいレポートになるでしょう。各章にその内容がわかる見出しを付けると、なお良いでしょう。

2.5 結論

結論は、レポートで扱った問題に対する回答です。読み手に分かりやすいように、余計な言葉で修飾したりせず、明確に述べるようにしましょう。もちろん、本論からかけ離れた結論になってしまってもいけません。

結論を書くときの注意点は以下の通りです。

- ① 序論での問題提起に対応している
- ② 結論において、新たな考察を展開しない
- ③ 「まとめ」ではなく、結論で終える

①は当然のことですね。練習問題の中でも、序論の「扱う問題」に書いたことと結論が、きちんとつながっているか確認しましょう。ちぐはぐになっている場合はどちらかを修正する必要があります。問題に対応する別の結論を導き出すのが基本ですが、事実をねじ曲げるわけにはいかないので、そのためには本論から考え直さなければなりません。本論と結論がしっかりしている場合は、「扱う問題」の方を修正してみても良いでしょう。

②は、考察は全て本論で行う、ということです。結論には必要なことだけを簡潔に書きましょう。

③は、本論を要約するだけになってはいけない、ということです。本論が長いときは、それをまとめておいた方が読みやすい場合もありますが、肝心の回答となる部分を明確に述べなければ意味がありません。

結論で大切なのは、とにかく簡潔に、明確にということです。「扱う問題」の所でも述べた通り、「〇〇はなぜ△△なのか？」という「問い」の形式になっている問題に対しては、「それは××だからである」という明確な結論を示すことができるはずですが、余計な言葉を加えてしまうと、読み手に誤解をさせてしまう可能性が増えてしまいますので、主張すべきことは全て本論に入れておくようにしましょう。

2.6 アウトラインが完成したら

練習問題に従ってアウトラインが完成したら、最終的な執筆に進むことになります。執筆時のチェックポイントは第 6 章を参照してください。

また、本論のところで理由（根拠）として客観的な事実を示すことの重要性について述べましたが、その客観的な事実をどこで得たかは「参考文献」として明記しなければ読み手には伝わりません。この「参考文献」については次の第 5 章で解説します。

参考文献

- 1) 酒井聡樹. 『これからレポート・卒論を書く若者のために』. 共立出版, 2007.
- 2) 酒井聡樹. 東北大学全学教育科目『「レポート力」アップのための情報探索入門』第 2～4 週配付資料. 「レポート作成法①～③」.

第4章 実習問題

問題. レポートのアウトラインを作ろう

下記の形式に従って、レポートの構成要素のうちタイトル・序論・本論・結論の内容をまとめて、レポートのアウトラインを作成してください。

各構成要素の詳しい内容については、第4章の2.2以降を参照してください。

■ タイトル: _____

■ 序論

◇ 扱う問題: _____

◇ 問題意識: _____

◇ 着眼点: _____

■ 本論

事実 1	考察 1
事実 2	考察 2
事実 3	考察 3
事実 4	考察 4
事実 5	考察 5

■ 結論
